

PROLOGUE

text by Kamani Hilakawa

ぼくにとってハワイアンミュージックが眩い光を太陽が浴びせる夏だけのものではなくなってから何年かが過ぎた。夏の訪れとともに、いや夏の訪れをせかさすように、そして夏を無理やり満喫させようとするかのようにハワイアンミュージックは巷に流れ、秋の訪れとともに消えてゆく...以前のぼくはこんな風に漠然としかハワイアンミュージックをとらえていなかった。ターニングポイントは9年前に訪れた。

94年に発売されたサニー・チリングワースの"SOLO"というCDアルバムを聴いてスラック・キー・ギターというハワイ独特のギター奏法を知った。一本のギターからリズム、メロディ、ベースが渾然一体となって紡ぎ出され、とても一人で弾いているとは思えなかった。そしてなにより、ゆったりとしたグルーブ感がとにかく聴いていて気持ちがよかった。またぼくは少し枯れた声で唄うサニーの慈愛に満ちた唄の虜にもなった。ハワイ語の存在をはっきりと認識したのもこの時で、それまでのハワイアンミュージックの概念が崩れた時でもあった。

ぼくはハワイアンミュージックにだんだんとのめり込んでいった。サニーはもちろんギャビー・パヒヌイをはじめとして他のスラック・キー・ギタリストや、HAPA、IZ、ケアライ・レイシエルなどのコンテンポラリーなハワイアンにも興味を持つようになった。あれは95年の夏だったと思う。青山のスパイラルホールでのスラック・キー・ギターのイベントに行った。一番のお目当てはデビュー間もないのにトップに昇りつめそうな勢いのHAPAだったが、今から思えば凄いい!!出演者達だった。スラック・キー・ギターの貴公子であり、門外不出というタブーを破りスラック・キー・ギターを広めるきっかけをつくったケオラ・ピーマー。そして最後のスラック・キー・レジェンドであるレイ・カーネと愛妻イローディア。そしてそしてレイ・カーネの最愛の弟子であり、我が国におけるスラック・キー・ギターいやそれだけではなく、ハワイアン・アイランド・フォーク・ミュージックのまさに草分けである山内アラニ雄喜氏。ライブの最後に出演者も観客もみな手をつなぎ唄った"Hawai'i Aloha"は今も忘れられない。その後も、ぼくのハワイアン・ミュージックを訪ね歩く旅はゆっくりとではあるが続いていった。

ハワイアン・ミュージックとの出会いの前後にウクレレとも出会っているのだが、かといってハワイアンを演奏するわけではなかった。何曲かはチャレンジしてはみたが、その頃のぼくにはどうも自分でしっかりこななかった。昔のポップスやブルースっぽい曲を自己流のなんともしまらない感じでウクレレを弾き唄を唄っていた。そんなぼくがハワイアンをやりたくなったきっかけはこのマガジンのVol.9で登場していただいた大輪好男氏のCDアルバム"MANA"だった。そしてさらに01年7月、PACIFIC 57のライブでの山内雄喜氏との二度目の出合いが拍車をかけることとなった。まずは山内氏にスラック・キー・ギターを習いはじめ、数カ月後には大輪氏にウクレレと唄をも習うことになった。二人の偉大なミュージシャンと出会いはさらにたくさんの音楽的出会いをうみ、たくさんの年令、性別をこえた友人がうまれた。そして、ますます人懐っこくて大らかなハワイアン・ミュージックの虜になり、その根底にあるトラディショナル=ハワイアン・アイランド・フォーク・ミュージックのアーシーでソウルフルな魅力に気付いた。そして、一度は失いかけたハワイの伝統音楽の復活の旗印となったギャビー・パヒヌイの底知れぬ魅力と他のミュージシャンに多大な影響をあたえた偉大さを再確認した。

今回のJEAN NASSAUS MAGAZINE Vol.12は観光客を喜ばすことが目的のスーパーニール的なハワイアン・ミュージック全盛のなかでもハワイの伝統音楽の原種を失わず復活の萌芽を芽生えさせたハワイの申し子たち"SONS OF HAWAII"、生き方がハワイそのものの自然体の巨人"PURE GABBY"、ギャビーと一緒にハワイアン・ルネッサンスという時代をつくった友人たち"AIKĀNE"、ギャビーに師事しギャビーの申し子となった"SONS OF GABBY"、ギャビーのアーシーな魅力の虜となりハワイアンとしてのアイデンティティを形成していった"WE ARE THE CHILDREN"たちのレコード・アルバムを山内雄喜氏の特別監修のもと、山内氏に師事しハワイ音楽の素晴らしさと奥深さを知った"SONS OF ALANI"の面々がナビゲートします。ほとんどがレコードで入手が困難なものもありますが、みな素晴らしいアルバムです。さあ、SONS OF ALANIと一緒にハワイアン・アイランド・フォーク・ミュージックを訪ねる旅に出かけましょう。